

20 世紀アメリカ合衆国の「ユダヤ＝キリスト教的」 イデオロギーの展開 —書籍文化と政治言説の観点から—

木村 智

1. はじめに

19 世紀までのアメリカは、人口比率的にもイデオロギー的にも、著しく「プロテスタント的」な国であった。ところが 20 世紀半ばになると、この状況に明らかな変化が見られる。特に顕著だったのは、カトリックとユダヤの両グループが、アメリカ社会のメインストリームに参入していったということである。それ以前のアメリカでは、カトリックやユダヤ人は、プロテスタントから見ればしばしば「改宗対象」であり、特に東欧・南欧系の貧しい「新移民」（大半がカトリックやユダヤ人）はアングロサクソン文化を乱す人々として蔑まれていた。しかし 1930 年代頃から、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教の 3 者の間に親和性・協力関係が生まれていき、実際に「ユダヤ＝キリスト教的」（Judeo-Christian）や「三宗教」（tri-faith）といった言葉が普及していく。この時代のアメリカでは、全米キリスト教徒・ユダヤ教徒協議会（1927 年設立）のような宗教間協力組織が活動し、また第二次世界大戦中にはプロテスタントに加えてカトリックとユダヤ教のチャプレンが活躍した。社会学者ウィル・ハーバークが主著 *Protestant-Catholic-Jew* において、いわゆる「トリプル・メルティングポット」論を展開したのは 1955 年のことである。

1980 年代以降、アメリカの宗教史家たちは、20 世紀中葉の「ユダヤ＝キリスト教的」伝統に光を当ててきた。この分野に先鞭をつけたのは、マーク・シルクの 1984 年の論文“Notes on the Judeo-Christian Tradition in America”である。シルクの研究は、1930 年代から 1970 年代にかけてのユダヤ＝キリスト教的言説の形成・発達・衰退の過程を描き出し、後続の研究者たちに影響を与えた。史家たちの観点は様々で、例えばデボラ・ダッシュ・ムーア（2004）やロニット・スタール（2017）は軍事的な観点からユダヤ＝キリスト教的伝統の構築を読み解き、またベニー・クラウト（1989）やケヴィン・シュルツ（2011）らは全米キリスト教徒・ユダヤ教徒協議会などの宗教間協力の流れに光を当てた⁽¹⁾。もっとも、「ユダヤ＝キリスト教的」伝統・言説というものが 1 つの研究領域として確立しているというよりは、むしろ様々な分野——教育、信教の自由、市民宗教、多元主義、人種、メディア、思想史など——の歴史家たちが各々の観点からプロテスタント、カトリック、ユダヤ教の間の関係性について議論してきた、というのが実情に近いだろう。

さて本稿では、このテーマに関連して最近刊行された以下の 2 つの本の内容を紹介・吟味する。

・ K. Healan Gaston, *Imagining Judeo-Christian America: Religion, Secularism, and the*

Redefinition of Democracy, Chicago: The University of Chicago Press, 2019, x+368 pp. \$35.00 (Paperback).

・ Matthew S. Hedstrom, *The Rise of Liberal Religion: Book Culture and American Spirituality in the Twentieth Century*, New York: Oxford University Press, 2013, 278 pp. \$55.00 (Cloth).

この2冊は、ともに20世紀中盤前後のプロテスタント、カトリック、ユダヤ教の関係を論じているという点で共通しているが、2人の著者のアプローチは全く異なっている。端的に言えば、ユダヤ=キリスト教的イデオロギーを分析する上で、1つ目のガストンの著作が政治言説という言わば「ハード」な側面を見ていくのに対して、2つ目のヘッドストロームの著作は書籍文化という「ソフト」な側面に光を当てている。従って、これら2書をレビューすることで、三宗教間関係の最新の研究動向をバランスよく紹介することができるだろう。

それにしても、なぜこの研究テーマがこれほどの注目を浴びるのだろうか。私見では、その重要な理由の1つは、20世紀半ばのプロテスタント、カトリック、ユダヤ教の関係を紐解くことが、今日のアメリカの宗教状況を考える上でも極めて有益だからである。これは2つの点でそう言える。第一に、このテーマは、現代アメリカのリベラル派を理解する上で有益である。今日のリベラル派は、キリスト教やユダヤ教のみならず、イスラーム、仏教、ヒンドゥー教その他のあらゆる宗教を対等に扱うことを美德とする。しかしアメリカにおいて、全ての宗教の多様性を称揚するこのようなリベラルな理念は、19世紀的なプロテスタント至上主義の状態から一足飛びに生まれたわけではない。端的に言えば、まず20世紀中葉にカトリックとユダヤ教がアメリカのプロテスタント一元主義の要塞を崩したことによって、20世紀末以降に仏教やイスラームその他の宗教が入り込む余地が生じたと見ることができる。その意味で、20世紀半ばの三宗教関係を調べることは、現代のリベラルな多元主義の形成過程を理解する上で不可欠だと言える。第二に、20世紀半ばのユダヤ=キリスト教的言説を見ることは、現代アメリカの保守派を理解する上でも有益である。今日、中絶・同性愛・環境運動などに反対する保守派は、しばしば自らの立場を「ユダヤ=キリスト教的」価値観に基づくものだと強調する。例えば2019年9月にLifeSiteNews.comに掲載されたある記事は、16歳の環境活動家グレッタ・トゥーンベリについて、神への信頼を欠いており「虚偽の傲慢さに絶望的なほどはまり込んでいる」と酷評している^②。そしてこのニュースサイトのホームページを見てみると、「LifeSiteNews.comは、伝統的なユダヤ=キリスト教的原理の社会的価値を重要視しています」と明記されている^③。このような今日の保守派のレトリックを理解するためには、その語の直接的な起源である20世紀中葉を見なければならないだろう。以上から、誇張を恐れずに言えば、20世紀半ばのプロテスタント、カトリック、ユダヤ教の関係の解明こそが、現代アメリカのリベラル派と保守派の双方を理解する上で不可欠なのである。

以下、2書それぞれについて、まずその内容を紹介し、その後で意義・課題を論じていく。

2. ガストン『ユダヤ=キリスト教的アメリカの想像』

はじめに、2019年にシカゴ大学出版から刊行された『ユダヤ=キリスト教的アメリカの想像——宗教、世俗主義、再定義される民主主義』について論じたい。著者はハーバード大学神学部の講師

K・ヒーラン・ガストンである。本書は合計 3 つのパートから成り、各パートにつき 3 つの章が収録されている。以下、はじめに各章の内容を要約し、その後で本書の意義について論じたい。

2-1 各章の要約

パート 1 「アメリカのユダヤ=キリスト教的言説の起源」では、19 世紀後半から 1930 年代において、ユダヤ=キリスト教的言説が少しずつ形成されていく過程が描かれる。

第 1 章「ヘブライ=ギリシヤ的からユダヤ=キリスト教的へ」において筆者は、19 世紀から 1920 年代の欧米における、ヘブライズムとヘレニズムの関係、さらにはユダヤ教とキリスト教の関係についての言説を整理する。つまり本章は、1930 年代に成立するユダヤ=キリスト教的言説の「前史」の説明である。著者によれば、19 世紀に支配的だったのは、以下の 2 つの（両立し得る）言説だった。1 つ目はヘーゲルに代表される置換神学（supersessionism）の発想、すなわちユダヤ教はキリスト教の生みの親だが、キリスト教の誕生後はもはやその役割を終えており、現代では何の存在意義も持たないという考えだ。2 つ目は、マシュー・アーノルドらに代表されるもので、西洋文明をヘレニズムとヘブライズムの混成とみなす考え方——ただしそのどちらの要素を強調するかは論者によって異なる——である（pp. 24-32）。アメリカでは、世紀転換期のリベラル・プロテスタント界において、キリスト教の原初的なあり方を求めて、ヘレニズム化される以前の古代ヘブライズムの預言的・道徳的要素の回復を目指す機運が高まった。その典型が、アドルフ・フォン・ハルナックの影響を受けた社会的福音指導者ウォルター・ラウシェンブッシュらであった（pp. 31-35）。またユダヤ知識人たち（例えばペンシルヴァニア大学のモーリス・ジャストロー）は、置換神学的なユダヤ教理解を拒否し、ユダヤ教は今日においても生きた信仰として文化・社会の発展に寄与できると主張した（pp. 36-39）。やがて 1920 年代になると、アメリカにおいて、置換神学の衰退、多元主義的な国家・文化観の形成、そして三宗教（プロテスタント、カトリック、ユダヤ教）間の協力運動の高まりが起きる。これらは、例えば改革派ラビのステューヴン・ワイズ、プロテスタント牧師のジョン・ヘインズ・ホームズやラインホルド・ニーバーらの言説に見出せる（pp. 39-44）。

続く第 2 章「もはやプロテスタント国家ではない」は、1920 年代から 1930 年代を扱う。東欧・南欧からの新移民（大半がカトリックやユダヤ人）の流入を受け、1920 年代のアメリカでは、アングロ・プロテスタントの間でネイティヴィズム（排斥主義）の機運が強まっていた。そしてこの頑迷な排外主義に対抗する形で、寛容性や市民的自由を求めるリベラル派・中道派のプロテスタント、カトリック、ユダヤ人、ヒューマニストが組んだ同盟を、著者は「反ネイティヴィスト同盟」と呼ぶ。例えば、アングロ・プロテスタントの反カトリック感情が噴出してピアス事件（1925 年）やアル・スミス大統領候補バッシング（1928 年）が起きると、ヒューマニスト、リベラル派・中道派のプロテスタント、ユダヤ人らは、リベラルな「反ネイティヴィスト同盟」を組んでカトリックを擁護する側に回った（pp. 50-51）。しかしこのようなリベラルな宗教間同盟は長続きしなかった。やがて国内外で「世俗主義」の高まり——公立学校の世俗化、世俗文化の拡大、共産主義や全体主義の台頭——が起きると、保守派のプロテスタント、カトリックに加えて、リベラル派・中道派のプロテスタントまでもが、世俗主義へのバッシングに夢中になっていく。この新しい宗教間の「反世俗主義同盟」は、かつての「反ネイティヴィスト同盟」とは異なり、リベラルな寛容さ・市民的自由・多様性をないがしろにし、むしろ国家の同質的な宗教的基盤を固めようとするものだった。こ

れに対してヒューマニストやユダヤ人たちは、リベラルな多元主義・寛容性・厳格な政教分離を支持したが、彼らは劣勢に立たされていた (pp. 55-71)。

第3章「民主主義の伝統」は、概ね1931年から1942年を扱う。この時代、ドイツでの全体主義の台頭を受け、アメリカの宗教者たちは宗教と民主主義の関係について様々な議論を展開していく。まずラインホルド・ニーバーら「例外主義」の論客たちが、宗教的自由・多様性ではなくむしろ一元的なユダヤ=キリスト教的原理に基づく民主主義の理論づけを行なった。例えば、三宗教の垣根を越えて共有された観念の1つに「人格主義」(personalism)が挙げられる。その支持者たちは、神の似姿に由来する個人の尊厳性を最重要視する立場から、民主主義の正当性を擁護し、逆に全体主義や世俗主義を批判した。また彼らは、リベラルな多元主義をも批判した。なぜなら多元主義者は市民的自由を強調するあまり、道徳における相対主義を招いてしまうからである (pp. 87-89)。このようにユダヤ=キリスト教的原理を民主主義の唯一の支柱とみなす「例外主義」言説に対して、「多元主義」陣営は寛容性・多様性を重視する民主主義理解を提示する。例えば1941年の編著 *Five Faiths Look at the World* の寄稿者の1人でヒンドゥー教徒のスワミ・ニヒラナンダは、道徳はユダヤ教やキリスト教の占有物ではないと述べ、民主主義は宗教の多様性を許容するものでなくてはならないと主張した (pp. 94-95)。

パート2「世俗主義および民主主義の再定義」は1942年から1955年を扱う。著者によれば、この時代を通して、例外主義的なユダヤ=キリスト教的言説に基づく民主主義理解が定着したのであった。

まず第4章「言説の開花」では、1942年から1945年が論じられる。著者は、この時期においてユダヤ=キリスト教的言説が本格的に到来したと述べて、実際には民主主義と宗教の関係性をめぐって様々な意見が対立していたと主張する。とりわけ著者は、1920年代以来の「例外主義」と「多元主義」の対立に焦点を絞る。例外主義者たちは、明瞭なユダヤ=キリスト教的原理——例えば、神に由来する人間の聖性・尊厳性の観念——だけが民主主義や人権を根拠づけることができると主張し、世俗主義、全体主義、政治的・神学的リベラリズムを糾弾した。この例外主義的な言説は、主流派のプロテスタントに幅広く見られ(例えばラインホルド・ニーバー、アーネスト・ジョンソン、ジョン・マッケイ)、さらに一部のカトリック(カールトン・ヘイズなど)やユダヤ人(ウィル・ハーバーグなど)にも支持された (pp. 102-117, 122-124)。これに対して、リベラルなプロテスタント、ユダヤ人、ヒューマニストたちは、宗教の多様性(無神論も含む)を重視する立場から、偏狭なユダヤ=キリスト教的言説の台頭に警鐘を鳴らした。彼らはアメリカを多元的な国家とみなし、信教の自由・寛容性・多様性こそが、民主主義の心臓だと主張していく。セオドア・ガスターやジョシュア・ブロックらユダヤ人、倫理文化運動(Ethical Culture)の指導者ジェローム・ネイサンソン、そして『ヒューマニスト』誌のエドウィン・ウィルソンらが、この言説の支持者であった (pp. 118-120)。

続く第5章「世界大戦から冷戦へ」は、1945年から1950年を扱う。著者は、この時期において例外主義的なユダヤ=キリスト教的言説がさらに支配的になったと主張する。その引き金となったのは、グローバルな共産主義の拡張と、アメリカ国内の教育論争だった。まず大戦後に主たる敵がファシズムから共産主義に変化したことで、より多くのカトリックが「世俗主義・共産主義 vs ユダヤ=キリスト教的な民主主義」という図式を受け入れるようになった (p. 128)。さらにユダヤ人

の中ではウィル・ハーバークが、民主主義は哲学的にも歴史的にもユダヤ＝キリスト教的な土台に基づくと主張していく (pp. 130-132)。また教育の領域では、エパーソン事件 (1947 年) とマツカラム事件 (1948 年) をめぐって最高裁判所が厳格な政教分離を支持する姿勢を見せると、カトリックやプロテスタントがそれに強く反発した。彼らは、厳格な政教分離・世俗主義はユダヤ＝キリスト教的価値観を学校から追放し、民主主義を骨抜きにしてしまうのではないかと恐れたのだった (p. 135)。例えば全米キリスト教徒・ユダヤ教徒協議会 (National Conference of Christians and Jews) は急いで会議を開いて政教問題を議論し、ニーバーらは宗教と政治を厳密に分離しないこと (accommodationism) が、アメリカの建国以来の伝統だと主張した (pp. 145-148)。

第 6 章「神なき共産主義と闘う」では 1950 年から 1955 年が扱われ、冷戦構造の中で例外主義的なユダヤ＝キリスト教的言説がさらに助長されていく過程が描かれる。例外主義の論者たちは、宗教的な土台の欠如は不道徳や全体主義を招くと警鐘を鳴らし、ひとえにユダヤ＝キリスト教的な神観念があってこそ地上での人間の同胞性・平等・民主主義が根拠づけられると主張した (pp. 154-155)。また国務長官ジョン・フォスター・ダラス——彼は米国キリスト教会連盟 (Federal Council of Churches) の元幹部である——も、アメリカのシステムが「ユダヤ＝キリスト教的信仰の道徳的観念によって深く [...] 影響され」たものであることを強調し、冷戦を宗教戦争とみなした (p. 174)。他方興味深いのは、著者ガストンの、アイゼンハワー大統領に関する議論である。一般にアイゼンハワーは、1950 年代のユダヤ＝キリスト教的な同質主義を象徴する人物とみなされてきた。実際、彼の任期中に合衆国の「忠誠の誓い」に“under God”の文言が加えられ、紙幣には“In God We Trust”の文言が加えられている。しかし著者は細かな資料分析に基づき、アイゼンハワーが 1954 年以降、「ユダヤ＝キリスト教的」という言葉の使用をきっぱりやめたことを指摘する。その背景には、国内外の宗教的マイノリティーへの配慮、アイゼンハワーの個人的来歴 (エホバの証人) に由来する宗教的エスタブリッシュメントへの違和感、そしてアイゼンハワーのスピーチライターを務めたエメット・ヒューズの影響があった (pp. 175-180)。

最後にパート 3「三宗教 (tri-faith) から多宗教的 (multireligious) アメリカへ」は、1950 年代後半から 2000 年代までをカバーしている。この時代を通してユダヤ＝キリスト教的言説は批判に晒されるようになり、代わって「多宗教的」というナショナル・アイデンティティが芽生えていく。

第 7 章「再考される世俗主義」において著者は、1955 年から 1965 年に光を当て、例外主義としてのユダヤ＝キリスト教的言説の「限界」が露わになっていく過程を論じる。確かに一方ではユダヤ＝キリスト教的言説は、この時代にも根強く支持され続けた。例えばビリー・グラハムら福音派は、1960 年代初頭の最高裁判所の判決 (公立学校からの祈りと聖書の追放) に危機感を覚え、ユダヤ＝キリスト教的伝統の維持を訴えた (p. 204)。またキング牧師ら公民権運動家もしばしば、人種平等の大義を主張する上で、それが真にユダヤ＝キリスト教的な価値観に基づくものだとすることを強調した (pp. 189-190)。他方、冷戦期の過剰な反リベラリズムや反世俗主義の風潮に辟易した知識人たちの間では、宗教の多様性や世俗性に対する肯定的な見解が芽生えつつあった。例えば、リベラルな多元主義を支持するアメリカ自由人権協会 (ACLU) は、合衆国の「忠誠の誓い」中の“under God”の文言の削除を求め、またユニテリアン・ユニヴァーサリスト派のある人物は、トマス・ジェファソンらリベラルな建国父祖たちに着目して「今も昔も、この国家がユダヤ＝キリスト

教的伝統に根ざしていたことなどない」と主張した (p. 207)。さらに、かつて反世俗主義の立場からユダヤ=キリスト教的価値観の堅持を主張していたニーバーでさえ、「世俗主義 vs 宗教」という単純な二項対立に疑念を抱き始めていた。ニーバーは著書 *Pious and Secular America* (1958年) において、宗教だけでなく世俗主義もまた、西洋文明の発展において不可欠な要素であったことを認めた (p. 203)。またニーバーは、仏教やイスラームその他の諸宗教を無視するウィル・ハーバークの *Protestant-Catholic-Jew* (1955年) の議論にも疑念を抱いた (p. 202)。

第8章「砲火を浴びるユダヤ=キリスト教的ヴィジョン」は、1965年から1975年を扱う。この時期は、移民法改正 (1965年) に伴う非西洋圏からの移民の増加によって、アメリカの宗教人口比率が変化し始める時期にあたる。しかし著者は、この時期にユダヤ=キリスト教的ヴィジョンの動揺を招いた真の要因は、移民の増加ではなかったと言う。まず、この時代には多くの宗教学者や社会学者が、世俗主義やナショナル・アイデンティティーについての新しい解釈を提示するようになっていた。彼らは、一元的なユダヤ=キリスト教的信仰に基づく国家像ではなく、より緩やかなコンセンサス——牧師・歴史家のマーティン・マーティーの言葉では「宗教一般」(religion-in-general)、また社会学者ロバート・ベラーの言葉では「市民宗教」(civil religion)——に基づく国家像を提案した (pp. 210-211)。また世俗主義を悪とみなす従来の風潮とは対照的に、神学者ハーヴェイ・コックスはアメリカの世俗化をむしろ歓迎した。コックスによれば、市民は世俗社会においてこそ、真に自由な宗教実践に専念できるようになるのであった (pp. 211-212)。またこの時代は、様々な社会運動が隆盛した時代でもある。その過程で、活動家たち——ネイティブ・アメリカン、フェミニスト、ブラック・ナショナリスト——は、ユダヤ=キリスト教的伝統を、抑圧的で父権的なシステムとして批判していった (pp. 216-220)。さらにニクソン大統領のウォーターゲート・スキャンダルは、アメリカのユダヤ=キリスト教的な道德秩序の崩壊を象徴する出来事として社会に衝撃を与えた (pp. 227-228)。

第9章「多宗教的な可能性」は、1970年代末から2000年代初頭を扱う。著者によれば、この時期においてユダヤ=キリスト教的伝統は「後退」したというよりむしろ「変容」したのだった (p. 230)。すなわち、この言説の使われ方そのものが変化したというのである。特に1973年にロー対ウェイド裁判で中絶が合法化されて以降、ユダヤ=キリスト教的言説は、(政治・経済に関する論争ではなくむしろ) 家庭や性の価値観をめぐる論争の中で、中絶や同性愛に反対する保守派が用いるレトリックと化していったのである。とりわけロナルド・レーガンの共和党政権時代にこのような用法が強まった (pp. 233-4)。他方リベラル派は、このようなユダヤ=キリスト教的言説を、頑迷な保守主義の表出として批判していく。つまりここにおいて、ユダヤ=キリスト教的言説は、いわゆる保守対リベラルの「文化戦争」の中の概念へと変わり果てたというわけだ (pp. 231, 244-245)。またレーガンとは対照的に、ジミー・カーターやビル・クリントンら民主党の大統領は、いわゆる「多宗教的」(multireligious) 路線を積極的に主導していく。彼らにとって「宗教の多様性」とは、もはやプロテスタント、カトリック、ユダヤ教の3者だけでなく、その他の非西洋系の諸宗教をも包含するものだった。カーターは、宗教・文化の多様性こそがアメリカの活気・創造性の源であると解釈し、さらに1978年には大統領として初めて「宗教多元主義」という言葉を用いた (p. 237)。同様にクリントンも、アメリカが「世界で最も多民族的、多人種的、多宗教的な民主主義」を体現していることは「大いなる神の恵み」であると述べた (p. 250)。

2-2 本書の意義・課題

ガストンの本書は、本稿冒頭で触れたマーク・シルクの 1984 年の論文以来のユダヤ＝キリスト教的伝統についての先行研究の論点・枠組みを踏まえながらも、より多様な主体——プロテスタント、カトリック、ユダヤ教の各グループの中の保守派とリベラル派、さらに宗教学者や政治家など——に着目することで、ユダヤ＝キリスト教的言説の複雑さを浮かび上がらせている。また各章の時代区分の細かさ——例えば第 4 章は 1942～1945 年、第 5 章は 1945～1950 年、第 6 章は 1950～1955 年——は、著者の歴史叙述の几帳面さを示していると言えるだろう。さらに、資料分析の緻密さも光る。例えば、アイゼンハワー大統領を 1950 年代のユダヤ＝キリスト教的言説の権化とみなす従来の定説を覆していく著者の論証は見事である。著者はアイゼンハワーが 1954 年以降「ユダヤ＝キリスト教的」という言葉を放棄したことを発見するわけだが、著者はその理由をアイゼンハワーの弟ミルトン・アイゼンハワーと、スピーチライターのエメット・ヒューズ（カトリック）が果たした役割の中に見出していく。ガストンの本書は、「言説」を研究する者は単に政治家の発話内容だけを調べるのではなく、そのスピーチを作っている側近たちの力関係にまで遡らねばならないということを教えてくれる。

このような包括性・緻密さゆえ、疑いもなく本書は、今後数十年にわたり、アメリカのユダヤ＝キリスト教的言説を研究する者たちが参照し続ける文献となるだろう。また本書の巻末に収録された“Bibliographic Essay”は、ユダヤ＝キリスト教的言説とその関連分野の先行研究のサーベイであり、良い学習の手引きとなっている。

本書において、特に宗教学徒が興味をそそられる点の一つは、アメリカのアカデミアとユダヤ＝キリスト教的言説の間の関係性であろう。とりわけ本書のパート 3 の議論は、20 世紀後半の宗教学者たちがアメリカの公的言説に一定の影響を与えていたことを示唆している。例えば著者は、ビル・クリントンの「多宗教的」言説の背景に、宗教学者ダイアナ・エック（ハーバード大学）の影響があった可能性を指摘する。エックはハーバードの「多元主義プロジェクト」の発起人であり、数々の著作を通してアメリカの「多宗教的」状況を肯定的に描いてきた人物だ。そしてガストンの指摘によれば、1993 年 9 月に、シカゴ万国宗教会議 100 周年を記念するイベント期間中の朝食会の場で、「クリントンはエックと直接的に出会っていた可能性がある」（p. 249）。こうした事例は、アメリカのユダヤ＝キリスト教的言説の解体において、宗教学者が一定の役割を果たしていたことの証左であり、アカデミアと公的言説の関わりを考える上で示唆的である（もっとも、20 世紀前半を扱った本書のパート 1 とパート 2 には、宗教学者があまり登場しない。この時期においてアカデミアがユダヤ＝キリスト教的言説の形成にどのように関与していたかについての体系的な研究が待たれる）。

他方、本書には幾らか曖昧な点も見られる。例えば、「多元主義」「世俗主義」「リベラル」などのキーワードの指示内容はしばしば不明瞭で、読者は混乱するだろう。また本書で取り上げられている言説の「選別基準」も明示されていない。果たして本書では、社会的影響力の大きい言説が扱われているのか、それとも知的クオリティの高い言説が扱われているのか、といった疑問が残る。さらに、本書（特にパート 1 とパート 2）は、アメリカのユダヤ＝キリスト教的言説を分析する上で、ヨーロッパとの関わり（19 世紀のヘーゲルやアーノルドらの知的言説、また 20 世紀のドイツ

の全体主義やソ連の共産主義など)を十分に踏まえている一方で、アジア諸国との関わりをほぼ無視している。しかし例えば1920年代や1930年代は、アメリカのリベラルなプロテスタント海外宣教師たちが、非西洋圏の宗教に対して肯定的態度を取るようになる時代である。それゆえ、彼らの著作・講演がアメリカ国内のユダヤ=キリスト教的イデオロギーに対してどのように挑戦していったか、などを考察してみるのも有益であろう。ヨーロッパとの関係性だけでなく、アジアとの関係性を踏まえることで、アメリカのユダヤ=キリスト教的伝統についてのよりトランスナショナルな理解が可能になるはずである。

3. ヘッドストローム『リベラル宗教の台頭』

続いて、ヴァージニア大学教授マシュー・S・ヘッドストロームの著書『リベラル宗教の台頭—20世紀の書籍文化とアメリカの霊性』(2013年)について論じたい。本書は、出版・読書文化の観点から、1920年代から1940年代のアメリカにおけるリベラルな宗教性の展開を分析したものである。以下、はじめに各章の内容を要約し、その後で本書の意義・課題を論じたい。

3-1 各章の要約

第1章「信仰の拡大」は、1920年代の消費文化の中でどのように宗教書籍(religious books)が興隆したかを論じている。第一次世界大戦後の幻滅感やアノミーへの対処として、ハーディング大統領ら政治家は、国家の道徳的土台を養うツールとしての宗教書籍の出版・流通を期待するようになっていた。また当時のプロテスタント指導者たちは、世俗的・消費的な文化の只中で宗教の社会的影響力が衰えつつあることを痛感しており、宗教書籍の出版によって大衆の心を掴もうと考え始めていた(p. 22)。本章の議論の中心は、宗教書籍週間委員会(Religious Book Week Committee)の1920年代の活動である。「宗教書籍週間」の企画は、アメリカ各地のプロテスタント教会、図書館、その他の諸団体(YMCAなど)の協力を得て、国民生活の向上のための宗教書籍の出版・宣伝・普及を目指した(pp. 28-34)。著者によれば、促進された宗教書籍文化は、教派・宗派的な色合いが薄く、むしろ広範な読者を引き付けるような内容のものであり(p. 37)、また道徳的向上・人格形成・男性性などの特徴が見られた(pp. 41-47)。なお注目すべきことに、宗教書籍週間委員会の発足2年目には、カトリックとユダヤ人のスタッフも加わっている(p. 36)。

第2章「宗教書籍クラブ」では、当時どの宗教書籍を読むべきかをセレクトし、それらを書店・図書館・大衆に推奨していた組織である宗教書籍クラブ(Religious Book Club)の活動が論じられる。同クラブを運営したのは、主流派プロテスタント系の牧師・知識人らであった。同クラブは1927年に設立されると爆発的に会員数を増やしていき、その約40%は(牧師・大学教授ではない)一般大衆が占めていたという(p. 65)。同クラブによって選ばれた書籍は、リベラル・プロテスタントの関心・価値観を反映したものが多く、最新の聖書学、キリスト教史、科学と宗教、社会問題などのテーマの本が多数を占めた。加えて、より個人的・霊的な分野(心理学、神秘主義、マインド・キュアなど)の書籍も頻りに推薦された(pp. 67-78)。またプロテスタントのみならず、ユダヤ教徒やカトリックが著した書籍——ラビ・アーネスト・トラットナーの*Unraveling the Book of Books*、カトリック司祭エルネスト・ディムネの*What We Live By*など——も頻りに取り上げられた(p. 69)。

第3章「探求者のための出版」では、ニューヨークの出版社ハーパー&ブラザーズ社の1930年代の活動が論じられる。実に1920年代後半になると、同社のような非宗教系の出版社にも、宗教書の刊行に特化した「宗教部局」が設けられるようになっていたのである（p. 84）。ハーパー&ブラザーズ社の宗教部局は、シカゴ大学神学部出身の敏腕出版者ユージーン・エクスマンの指揮の下、数々のベストセラーを刊行していく。例えば当時の高名なモダニスト神学者ハリー・エマソン・フォズディック（ニューヨーク市のリバーサイド教会の牧師）は、まさにエクスマンの下で、*As I See Religion*（1932年）などのベストセラーを連発していったのである。本章では、ラルフ・ウォルド・エマソン、ウィリアム・ジェームズ、ボストン人格主義などの影響を受けたフォズディックの思想が論じられる（pp. 92-100）。さらに本章は、エクスマンに見出された他の作家として、エメット・フォックスとグレン・クラークに光を当てる。彼らは「ポジティブ・シンキング」の分野の本を著し、宗教を健康・富・成功などと結びつけたのであった（pp. 100-106）。

続く第4章は、アメリカの読書文化のさらなる発展が見られた第二次世界大戦期を扱っている。戦時中、ナチス・ドイツの焚書政策とは対照的に、アメリカにおいて書籍は「思想の戦争における武器」として積極的に推奨された（p. 115）。ニューヨークの複数の出版社は合同して戦時下読書評議会（Council on Books in Wartime）を設立し、アメリカ人の教養・人格・霊性・愛国主義を高めるべく、国内の読書文化の促進に努め、さらに膨大な量のペーパーバックを従軍中の兵士らに提供した（p. 126）。またこの戦時下読書評議会の中には、宗教書籍委員会が設けられており、さらに全米キリスト教徒・ユダヤ教徒協議会（National Conference of Christians and Jews）と提携することで、宗教書籍の流布に力を注いだ。その活動の中心にいたパット・ピアードは、宗教書籍が不安な情勢を生きるアメリカ人に信仰心・希望・安らぎをもたらすことを期待した（p. 122）。また高名なチャプレンのエルウッド・ナンスは、アメリカ人が宗派・教義を超えて団結することを意図して*Faith of Our Fighters*（1944年）というアンソロジーを編纂し、その中にプロテスタントのみならずカトリックとユダヤ教のチャプレンによるエッセイも収録した（pp. 122-123）。

それでは、戦時中のファシズムへの対抗として形成された宗教的アイデンティティーとはどのようなものだったのか。第5章「信仰間の絆の創出」で著者は、それがプロテスタント的なイデオロギーではなく、むしろ「ユダヤ=キリスト教的」伝統という新しいイデオロギーだったと論じる。合衆国政府や軍とも緊密に連携していた全米キリスト教徒・ユダヤ教徒協議会は、書籍などを通して、兵士や国内の人々向けにユダヤ=キリスト教的な価値観を促進していった。同協議会は、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教の政治的かつ神学的な共通性を強調し、*The Religions of Democracy: Judaism, Catholicism, and Protestantism in Creed and Life*（1941年）や“Declaration of Fundamental Religious Beliefs Held in Common by Catholics, Protestants, and Jews”（1942年）などを刊行した（pp. 145-146）。なお著者ヘッドストロームは、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教の三者を包摂する当時の広範な宗教性を、「宗教的コスモポリタニズム」とも言い換えている。

そして全米キリスト教徒・ユダヤ教徒協議会の活動の中でも特に重要なのは、戦時下読書評議会との提携で行った宗教書籍週間（Religious Book Week）キャンペーンである。（これは第1章で見た1920年代の同名の運動とは別物である。）その企画者たちは推薦書籍をリスト化し、それにポスターやしおりを添えて、合計6,000もの図書館に送付した。また推薦書籍のリストは、プロテスタ

ント、カトリック、ユダヤ、友好 (Good-will) の 4 部門に分かれていた (p. 153)。推薦されたのは、リベラルな寛容さ、公共性、高度な文学水準を兼ね備えた書籍であり、宗教に関連した歴史・社会・政治などのテーマが好まれた。例えば 1944 年に推薦されたのは、カトリックのジャック・マリタンの *Art and Scholasticism*, ラインホルド・ニーバーの *The Nature and Destiny of Man* などの書籍だった (p. 154)。また、より個人的・霊的・神秘主義的なテーマの書籍——ルーファス・ジョーンズの *Pathways to the Reality of God*, ディーン・インゲの *Personal Religion and the Life of Devotion* など——もしばしば推薦されている (p. 155)。なお、「友好」部門で推薦されたのは、宗教間の相互理解や共通性を強調した書籍である。例えば同部門で推薦された *So Desert Democracy* (1939 年), *Religions of Democracy* (1940 年), *Common Ground* (1938 年) などの著作は、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教がアメリカの民主主義の基盤であると主張し、さらにその 3 者間の友好を説いている (pp. 157-158)。

続く第 6 章は、1940 年代後半を扱う。第二次大戦直後のアメリカは、リバイバルや教会出席率の増加が起きたことで知られているが、著者ヘッドストロームによれば、宗教書籍文化もまた同時期にさらなる繁栄を迎えた (p. 175)。特に顕著だったのは、心理学的・神秘主義的なテーマを扱った書籍の人気ぶりである。本章でヘッドストロームは、この分野における当時の 3 冊のベストセラー、すなわちプロテスタントのハリー・エマソン・フォズディックの *On Being a Real Person* (1943 年)、カトリックのトマス・マートンの *The Seven Storey Mountain* (1948 年)、そしてユダヤ人のジョシュア・ロス・リープマンの *Peace of Mind* (1946 年) を分析していく。これら三宗教の著者たちの本は、特定の宗教・宗派に限定されない幅広い読者を獲得したという。ヘッドストロームはこの現象を、1920 年代以来のリベラルな宗教読書文化、さらには直前の第二次大戦期に伸長した多元主義 (プロテスタント、カトリック、ユダヤ) の結晶として解釈する。もともと、この 3 冊の本の内容は様々で、例えばフォズディックの本は「自己受容」「憂鬱の制御」といった問題を扱った一種のハウツー本であり、他方マートンの本は筆者自身の懊悩・遍歴を記した自伝的な作品で、人間の罪性や悪の遍在性といったテーマが色濃い。

終章では、本書全体のまとめに加えて、いくつかの補足がなされている。重要なのは、本書で見たような 1920 年代から 1940 年代にかけての宗教書籍文化は、当時既に批判にも晒されていたということである。例えばこの時期の宗教書籍文化の特徴である「多元主義」(プロテスタント、カトリック、ユダヤ) に対しては、リベラル派のプロテスタント内部からも批判が出ていた。実際、『クリスチャン・センチュリー』誌のある記事(1951 年)は、「多元主義」を「国家の危機」(national menace) と表現し、特にカトリックの公的存在感の増大に警鐘を鳴らしている (p. 222)。また宗教書籍文化における心理学的スピリチュアリズム、マインド・キュアなどのテーマも、批判を受けた。例えば『クリスチャン・センチュリー』誌の編集者ポール・ハッチンソンは、ポジティブ・シンキングや心理学的スピリチュアリズムを、楽観的で軽薄な人間観だとして批判している (p. 222)。

3-2 本書の意義・課題

ヘッドストロームの本書の最大の意義は、「出版」「読書文化」への着眼そのものである。19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのアメリカの宗教的リベラリズムに関しては既に多くの先行研究があるが、その大半がプロテスタントの神学思想や教会組織のような言わば「カタイ」テーマを扱った

ものであった。それに対してヘッドストロームは、出版・読書文化に着目することで、この時代の「大衆的な宗教と霊性」(p. 4) を解明しようと試みる。また宗教書籍の発展を追う上で、神学史や教会史よりも、むしろ広範な社会・文化的なコンテキストの方を見ようとするヘッドストロームの姿勢は、彼が宗教学ではなくアメリカン・スタディーズの出身であることを反映しているのかも知れない。なお、神学や教会の外へ外へと視線を向ける姿勢は、アメリカの宗教的リベラリズムについての近年の研究動向とも合致している⁽⁴⁾。

一例を挙げれば、本書におけるユージーン・エクスマンの活動への着眼(第3章)は、宗教学徒にとって極めて有益な視座を与えてくれる。エクスマンが当時務めていたのは、一見「世俗的な」出版社であるハーパー&ブラザーズ社だ。それゆえ彼の活動は、狭義の教会組織や明確に「宗教的な」出版社・雑誌だけを見がちな宗教学者であればまず見落とししてしまうような研究対象なのである。しかしこの時代のアメリカでは、複数の非宗教的な出版社が、宗教というコンテンツに商業的価値を見出し、社内に「宗教部局」なるものを設置するようになっていた。エクスマンはまさにこの文脈において活動し、宗教書籍文化の興隆を支えたのである。ヘッドストロームのこの着眼は、狭義の宗教組織ではない「世俗」の中に「宗教」を見つけ出していくことの重要性を、宗教学徒に教えてくれる。

また本書の美点の一つに、宗教読書文化の言わば「マテリアル」な側面への着目が挙げられる。本書の各章でヘッドストロームは、宗教書籍週間委員会や全米キリスト教徒・ユダヤ教徒協議会が本の宣伝をする際にポスターを盛んに用いたことに注目する。そしてヘッドストロームは、実際に本書の中でこれらのポスターの画像を添付して、それらについて細かい分析を試みている。その好例が、全米キリスト教徒・ユダヤ教徒協議会が1945年から1946年の宗教読書週間キャンペーンの際に用いたポスターだ(p. 164)。ポスターの中央部に描かれた3冊の本それぞれには、ダビデの星(ユダヤ教の象徴)、ペテロの天国の鍵(カトリックの象徴)、簡素な十字架(プロテスタントの象徴)が刻印されている。そしてこれら同じサイズの3冊の本が仲良くびったりと横に並んでいる様子から、この時代のプロテスタント、カトリック、ユダヤ教の絆が象徴的に窺えるのである。つまり先に紹介したガストンの著書がもっぱら言説の分析を行っていたのに対して、ヘッドストロームの本書は、ユダヤ＝キリスト教的イデオロギーの生成をより視覚的に描き出していると言えよう。このような研究手法は、近年のアメリカ宗教史で強調される“lived religion”や“material religion”の視点とも重なり、大いに評価できるものである。

他方、本書には幾らか曖昧な部分もある。例えば、著者が本書で度々取り上げるテーマ、すなわち「ユダヤ＝キリスト教的」伝統とは、読書文化の中でどの程度固定的なものだったのだろうか。確かにこの時代の読書文化を通じて、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教の3者の絆が強まったことは間違いない。ヘッドストロームが指摘するように、宗教書籍週間委員会にはプロテスタントに加えてカトリックとユダヤ人のスタッフもいたし、また三宗教の著者たち——フォズディック(プロテスタント)、マートン(カトリック)、リーブマン(ユダヤ人)など——は宗教・宗派の違いを超えて幅広く読まれていた。しかし問題は、この時代の宗教書籍ブームが、本当にプロテスタント、カトリック、ユダヤ教という3つの伝統のみを「正統」とみなすものだったのか、という点である。例えば、アジアの宗教(仏教、ヒンドゥー教など)もまた、この時期のアメリカの出版・読書文化の中で一定のプレゼンスを獲得しつつあったのではないだろうか。当時ガンディーやタゴ

ールのような東洋の宗教家は、『クリスチャン・センチュリー』誌などのリベラルな雑誌上で好意的に表象されていた。また同時期にはアメリカの白人仏教徒ドワイト・ゴダードが、*A Buddhist Bible* (1932年)、*Followers of Buddha: An American Brotherhood* (1934年)などの著作を世に送り出している。さらにユニオン神学校の宣教理論家ダニエル・ジョンソン・フレミングは、アジアの宗教との対話・協力を積極的に検討する著作——*Attitudes toward Other Faiths* (1928年)、*Ways of Sharing with Other Faiths* (1929年)など——を刊行している。フレミングの著作の多くがアソシエーション出版やフレンドシップ出版などの有名な出版社から刊行されていたことは、当時のアメリカの主流の出版文化におけるアジアの宗教への友好性の高まりを示唆している。このような事情を踏まえるならば、20世紀前半の宗教読書文化を、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教の三宗教に限定されない、より広範な宗教性を許容する文化とみなすこともできるのではないだろうか。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 19J22645 の助成を受けたものである。

註

- (1) Mark Silk, “Notes on the Judeo-Christian Tradition in America,” in *American Quarterly* 36 (1), 1984, pp. 65-85; Deborah Dash Moore, *GI Jews: How World War II Changed a Generation* (Cambridge: Harvard University Press, 2004); Ronit Y. Stahl, *Enlisting Faith: How the Military Chaplaincy Shaped Religion and State in Modern America* (Cambridge: Harvard University Press, 2017); Benny Kraut, “A Wary Collaboration: Jews, Catholics, and the Protestant Goodwill Movement,” in *Between the Times: The Travail of the Protestant Establishment in America, 1900-1960*, ed. by William R. Hutchison (Cambridge: Cambridge University Press, 1989), pp. 193-230; Kevin M. Schultz, *Tri-Faith America: How Catholics and Jews Held Postwar America to Its Protestant Promise* (New York: Oxford University Press, 2013). なお、この分野の先行研究に関するより包括的なサーベイとしては、本稿で扱ったガストンの著作の巻末に収録されている“Bibliographic Essay”を参照。
- (2) Deana Chadwell, “Greta Thunberg Is a Victim of Her Own Parents, Not Global Warming,” in LifeSiteNews.com, September 30, 2019, <https://www.lifesitenews.com/about> (accessed January 27, 2020)
- (3) “About,” in LifeSiteNews.com, https://www.lifesitenews.com/opinion/greta-thunberg-is-a-victim-of-her-own-parents-not-global-warming?utm_content=buffera5bf3&fbclid=IwAR3ku0a9rweHnasXReuize2VrYZPgeHuNGDBipn7f8_TCjUQzHeRD4aALeg (accessed January 27, 2020)
- (4) 宗教的リベラリズムの研究動向については、ヘッドストロームによる以下のサーベイ論文を参照。Matthew S. Hedstrom, “New Directions in the History of American Religious Liberalism,” in *Journal of the American Academy of Religion*, 79 (1), 2011, pp. 236-247. な

お、19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカの宗教的リベラリズムの研究において、神学や教会組織の外部へと光を当てようとする動向としては、リー・シュミットとサリー・プロメイ主導の研究プロジェクトが特に有名である。同プロジェクトの成果は以下の編著にまとめられている。Leigh E. Schmidt and Sally M. Promey (eds), *American Religious Liberalism* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2012). なおヘッドストロームも、この研究プロジェクトの一員である。